

老舎『文博士』試論

渡 辺 武 秀*

On Lao shê (老舎)'s "Wên po shih (文博士)"

Takehide WATANABE

概論

「文博士」の原名は「選民」、作为单行本发行的时候改为现书名。这也是一篇「幽默」小说。文博士是一位在美国获得了博士学位的人物。他说：“咱们就是当代的状元，地位、事业都给咱们留着呢；就是那有女儿的富家也应当连人带钱双手捧送过来！不是咱们的希望过高，是理应当如此！”这种想法如果是开玩笑的话还可以，但文博士不是开玩笑。他在说真话，他真的想追求地位、事业以及有钱人的女儿。作品里写的就是文博士的这种“追求”。

文博士虽然确实没有什么品德思想，可是最后地位、事业、富家的女儿全都得到了。这是为什么呢？为什么他能够成功呢？就因为他是“美国博士”。

这样可以吗？有没有问题？老舍在此作品里作了答复。

Keywords: humor laugh doctor

序

『文博士』はもともと『選民』という題で雑誌「論語」の第98期(1936年10月)から第115期(1937年7月)に渡って連載された作品である。単行本としては1940年11月に出版され、この時に題名が『選民』から『文博士』に変更された。^(註1)

この『文博士』を連載した「論語」という雑誌は所謂「ユーモア」を標榜しており、この雑誌には、1934年、既に『牛天賜伝』を連載したことがある。老舎は『牛天賜伝』の執筆時に、この雑誌の性格を考え「ユーモア」を強く意識したことを自ら告白している^(註2)。この『文博士』の中味について、老舎自ら言及した文章はない。ただ『牛天賜伝』の場合から推し量るに、やはり『文博士』を書く際にも「論語」に掲載するとい

うことで老舎が「ユーモア」を意識したのであろうことは十分考えられる。

さて老舎の「ユーモア」作品の理解であるが、やはり彼の作品の場合「笑い」に注目し、何処に、どのような「笑い」があり、その「笑い」がストーリーの展開の中でどのような意味を持つのかを考慮に入れながら作品解釈を行うしかないのではないか。こうすることで、表面からは見にくい、老舎の、作品での工夫、独自性、創作意図といったものが幾らか見えて来るように思う。^(註3)

したがって、この小論では、『文博士』について「笑い」を中心に据えて考えることで、この作品で老舎の行っている多くの試みを明らかにし、作品の中の「笑い」の陰にそっと忍び込ませてある老舎独特の人間や社会の捉え方、そしてそこから窺える老舎の指摘や主張を作品の中から明らかにしたい。

この作品は、老舎の代表作といわれる『駱駝祥子』と同じ時期に発表されているにもかかわらず

平成10年10月16日

* 総合教育センター・助教授

らず、これまでこの作品について論考されることはなかった。したがって、今回の考察は、この作品を老舎の総ての創作過程の中にどのように位置づけるか、或いは老舎は畢竟どのような文学を創り上げようとしていたのかを知ることにも繋がっていくと考えている。

—

この『文博士』という作品は、題名からもすでに明らかなように、主人公は文博士という人物である。

ストーリーの展開はそれほど複雑でない。

最初は済南の場面から始まり、続けて回想というかたちで、文博士がアメリカで五年掛かって哲学博士の学位を取って中国に帰国して来た人物であることが紹介される。帰国して半年は仕事が見つからないが、やがて北京の焦委員という人物の紹介で済南の「齐鲁文化学会」に行くことになる。ここで済南の実力者、唐という人物と知り合いになり、彼の援助で済南における生活の足場を固める。

そして、のちに、済南の大きな薬屋、大生堂に乗り込み、そこの六番目の娘と知り合う。この娘とはすぐに仲良くなり、婚約、結婚と進んで行くことがほぼ決定的になる。同じ頃、官職の話も出て来、最終的には大生堂の方のコネでそれも獲得することができる。

このように、この作品には文博士がアメリカ帰国して以後から、中央の官界に昇る足がかりのようなものを得るまでのことが書かれている。

ただ、ストーリーのわかりやすさに比べると、作品作りには、かなり技巧を凝らしているように見える。

このあたりを、まず作品の冒頭から見てみる。冒頭は以下のように始まる。

西門或いは南門を通るたびに、あの壊れた城楼や城壁の砲弾の痕を見、文博士はまるで料理の中

の蠅を食べたみたいな吐き気を感じた。吐き気だ。悲しみではない。文博士は決して五三惨案を記憶しておくことに熱心でないことはなかった。そうではなく、彼はこんな壊れたものをいつまでも大通りに置いておくべきではないと感じているのだ。修理できるのなら修理し、できないのならばいっそ壊してしまえばいい。修理もできない、壊しもしない、こんなところに中国の希望のなさが現れている。^(註4)

一般に戦争の傷跡を残しておくのは、それ相当の意味があるとされる。文博士はこの考えを真っ向から否定するのである。

ただ、「現状」を嘆くのは、いやしくも知識人であれば、やはり自分の心の中には必ず「理想」とするものがあり、往々にして目の前に見える「現状」が自分の「理想」と余りにかけ離れているが故に、しばしば「現状」を憂え嘆くことになる。だからこの種の嘆きは知識人としては寧ろ当然のことと考えることもできる。ただ、いささか大胆な発言だけに、やはり発言の根底にある、文博士の「理想」が果たしてどういふものか、この点は問題として残る。

そして、この後、以下の文章が続いていく。

中国に希望がない所以は、第一に人材がいまいということであり、第二に何人か人材は居たとしても、国家社会が抜擢して使うということを知らないということである。文博士はこのように考えていた。^(註5)

この作品で文博士は自信満々のアメリカ帰りの、優れた知識人である印象を濃厚に漂わせながら登場するが、このような部分にその一端を見ることができよう。自分の才能に自信があるから、自分を認めてくれない社会に対しても不満を持つ。いわば「才人」「不遇」を嘆くという型である。

また自分が「アメリカ帰り」であるということも彼の誇りである。

彼が帰国したての頃、彼は中国とアメリカを比べることはできないと知っていた。これは中国を勘弁してやるばかりか、望みが高すぎではいけないという警告でもある。理に従えば、帰国したら直ちに最高の地位と待遇を得べきなのである。もしこんなふうであれば、彼にはきっとこの遅れた国家を救う方法がある。たとえ自分が素晴らしい方法を思いつかなかったとしても、少なくとも彼には応用すべきアメリカの方法というものがある。^(註6)

「アメリカ」は中国とは比べものにならないほどの素晴らしい国であり、そのアメリカに居たという、このことだけでも意味があると言うのだ。ただ、この種の発言は、アメリカ帰りの「留学生」に対して、或いは「留学生」の間で、「留学」の意義を語る場合に必ず出てくる言葉の一つでもあるように思える。

彼はとっくに一步退いて考える準備をしていた、事をするのに急ぎすぎではいけない、中国は中国なのだから。彼はただ毎月四五百円のお金が入るだけでよい。ゆっくりまず適当にやって、翼がしっかり出来上がってから、一番高いところに向かって飛んでいくのだ。^(註7)

アメリカと中国は違うのだから、焦っても仕方がない。最低の処から一步一步高みに昇って行くしかない。それはそのとおりである。ただ、一ヶ月に給料の額が四五百円といえば、当時に於いても相当高い給料である。にもかかわらず、まず従事するのはそれぐらいの仕事でよいというのは、余りにも要求が高すぎる。

とはいえ、当然ながら、彼の側から言えば、彼自身はそれを「普通」だと考え、そのように信じているのである。もしこうであれば、「半年仕事が見つからない」というのも当然である。つまり「見つからない」のが当たり前で、「見つかる」のが異常なのである。にもかかわらずこの物語が「見つかる」方に向かっていくところに、

一種の「可笑しさ」もある。

冒頭の部分を、幾らか長く引用した。最初は幾らか奇抜な考え方を示すけれど、よくよく見てみると、冒頭で紹介されている、この種の考え方は概ねどこかで聞いたような言葉のような気がしてくるのである。つまり、全体的に、文博士が考えているこのような内容は、文博士のみが考えていることというよりは、むしろ「アメリカ」帰りの留学生たちの間で、或いは誰かが「アメリカ」帰りの留学生に向かって、「中国の現実」とは無縁の処で、或いは「中国の現実」を無視したところで、頻繁に話されるもののようにも思えるのである。

この雰囲気、これが作者の作品冒頭に於ける作戦なのであろう。そして、作品の最後に至って文博士の本当の姿が理解できた時点で、この作品の冒頭で述べている文博士の発言、考え方の「可笑しさ」が見えてくることになる。このことが、この作品で行われるように見える。^(註8)

二

この作品で、まず目に付くのは、文博士ら登場人物を三人称で呼んでいる「語り手」が居ることである^(註9)。「語り手」は「彼は……思った」「彼は……考えた」と言いながら、それぞれの登場人物の心の中まで立ち入って行き、時には登場人物を離れて、客観的にも真実であると思われるコメントを加えたりする。このような「語り手」の介入によって、作品に、独特の世界が出来上がっているように見える。

まず、このことが窺える次の場面を例に挙げて考えてみる。

焦委員という人物は中央の実力者である。焦委員の紹介で文博士は済南の「齐鲁文化学会」というところに行くことになる。その彼が文博士を済南に派遣する意図を、「語り手」は以下のように述べる

焦委員の方法は新しい留学経験者を派遣して

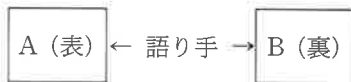
商家や農家に深く入り込ませることである。義兄弟のちぎりを結ぶとか、義理の息子になるとかは、彼の見方によると、もう時代遅れである。インテリ階級の人々もまたこんな手を使うのをは恥ずかしがる。しかも実質的なものからしても、これらは婚姻の確実性に遥かに及ばない。ただ彼らに婿殿を与えさえすれば、それで彼らの金銭と勢力をしっかりと手に握ることになるのだ。^(註10)

これについて「語り手」がさらに以下のような説明を付け加える。

この方法は焦委員の口では「別に手段を拓く」ということになる。派遣されて富商と結びつくの「振興実業」と名付けられ、都市の富農と結びつのが「民間に行く」である。だから、彼が文博士を済南に派遣するのは、その「実業振興」と「民間に行く」と人に必要だということになる。^(註11)

この発言によって、読者に文博士派遣の「からくり」をほのめかすことになる。

この引用文でまず明らかにしたいのは、「語り手」の話の中で意図的に、一つの事実に関する表と裏——それは或いは建前と本音の部分と言えるかも知れないし、或いは表面に現れ出ている部分と、裏に隠れ潜んでいる部分とも言えるかも知れない——がしばしば暗示されるということである。それを仮に「A: 表」と「B: 裏」ということにすれば、以下のように図示することができる。



この表と裏の間に「語り手」があり、作品中の物語は「彼」「彼女」という三人称で描き出される。そして時に応じて「語り手」が、それぞれの登場人物「彼」「彼女」の心の中を見せたりしながら、事実の両局面を明らかにしていくの

である。

もっと具体的に、この構造を説明すると以下のようになる。

一つの建前の世界がある。それは「美しいスローガン」で謳われる部分であるとも言えるかもしれない。「別に手段を拓く」「振興実業」「民間に行く」という言葉はまさしくそうである。当時、政府が知識人に奨励した政策であろうことを連想させるが、知識人が自分の知識を持って、民間に入って行き、実業を興す。確かにこれ自体は悪くない。むしろ素晴らしいことである。したがって、一方では、焦委員が文博士を「齐鲁文化学会」に派遣するのは、まさしく「別に手段を拓く」「振興実業」「民間に行く」の美名に沿うものである。そして、この実現のために焦委員は文博士を派遣し、文博士がそこへ行くのである。少なくとも建前からすればこうなる。

しかし、表（建前）はそうであるが、裏（本音）は違うのである。実は焦委員は裏では大地主とか大商人とかの中に勢力を拡大しようとたくらんでいる。このために留学生を使おうとしているのである。つまり焦委員が派遣した留学生と大商人、大地主の娘とを結婚させることによって、自分の勢力をそれらの人々に植え付け拡大しようとしている。

だから、焦委員の考えでは、まさに留学生と大商人、大地主の娘との「婚姻」という方法が「別に手段を拓く」であり、大商人の娘と「婚姻」を結ぶのが「実業振興」であり、大農家の娘と「婚姻」を結ぶのが「民間に行く」なのである。

文博士は、この人物を信用し、彼の、この話しに乗ったのであるから、文博士にとっても済南の「齐鲁文化学会」に行くのは大商人、大地主の娘との「婚姻」が目的ということになる。

さらに、この、「齐鲁文化学会」に焦委員が派遣する、文博士が赴任するという事実を裏と表で、作品のすべての情報でまとめると、以下のようになるだろう。

A（表面）：焦委員は国家社会の発展のため留学から帰ってきた人物を地方に派遣することに決め、アメリカから帰国したばかりの博士の学位を持つ文という学者が、ちっぽけな、地方の済南というところにある「齐鲁文化学会」に赴任する。この学会は「山東省の歴史、地理、古物、芸術を研究するという主旨」^(註12)で創設されたものである。立派な人物の、社会に貢献する素晴らしい行為というふうになる。また、「齐鲁文化学会」というのはお金とは無縁の会のような印象もある。

↑
（語り手）
↓

B（裏）：焦委員は地方の大地主、大商人の間に勢力を拡大しようと思っている。この方法として新留学生たちを地方に送り込み、その地の大地主、商人の娘と結婚させることで実現しようとしている。このやり方と文博士の考え方が一致する。文博士も金持ちの娘と結婚し、それを足場にして、社会の高い地位を確保し、自分の考えを実現しようと考えている。だから、焦委員の指示に従って赴任したのである。「齐鲁文化学会」に来たのは、とりあえずそこに身を寄せ、地方の有力な金持ちに取り入り、その家の娘と結婚するための最初のステップにすぎないのである。しかもその学会は「焦委員が会長になってから会を一回も開かれていず、会所も次第次第に他の人に分割占領されてしまいつつある」^(註13)というありさまである。

この作品はBの世界を中心に語られ、時にはAが書かれない場合もあるが、全体として、前述のように「語り手」が、時に応じて、このBを語りながらAを仄めかしたり、AとB並べ

て見せて、事の真相を示していくことになる。この結果、ここで行われている諷刺のいくつかが明らかになってくる。

ここでは「齐鲁文化学会」の実態。それを統括する者、そこに派遣され働く者の姿勢。このようなものが諷刺され、社会が良くなっていかないのは実際にこのようなことが頻繁に行われているからだという指摘が成されているのである。

この作品では、このような「表と裏」「建て前と本音」の部分での「可笑しさ」を描き出しており、これがこの作品のセールスポイントのひとつになっているように見える。

だから以下のような場面もしばしば出てくる。文博士は「齐鲁文化学会」にやってきてベッドもなく、湿気も多い部屋で毎日寝ることになり、悲惨な気持ちになっていた。そこへ唐という人物がこの部屋よりもっと快適なところに引っ越しさせようとする。にもかかわらず文博士は以下のような発言をするのである。

「いや、ここが良いのです。」文博士は唐さんを遮って言った。「僕は中国の社会状況を多く吸収したいし、民間の人々の暮らしにしっかりと入りたいのです。このことは人民の苦しみに関心を持っていると言うこともできるでしょうか!」^(註14)

敢えてこう、わざとらしく発言させることによって、これまで描き出された本音の世界との落差によって読者の「笑い」を引き出し、さらに作品では多くは述べられていない表面の世界はどのような展開になっているのか、ということを改めて読者に想像させるのである。

三

次に、文博士に伴う「笑い」がどのような処に発生しているのかを更に考える。

既に述べたように、文博士は金持ちの娘と結婚するために済南の「齐鲁文化学会」にやって

来た。ではどこに文博士は必ず「金持ちの娘と結婚できる」と確信するような根拠を置いているのか。まず、この彼の根拠とする部分に「笑い」の一つが窺えるように思える。

実はこの「金持ちの娘と結婚できる」第一の根拠になっているのは、アメリカで得た「博士」というものにある。では、まずこの「博士」というのを文博士がどのように認識しているか、から見ていくことにする。これについて、文博士がかつて留学時代に友人に対して行った発言の部分を見てみよう。

我々は憂えることはない。昔、貧しい学生が状元に合格すると、たちどころに妻・財・位・禄すべて揃うことになった。我々はまさしく現代の状元である。地位、事業は皆我々のために用意され、娘のいる富豪も人からお金まで両手に捧げ持ってくるべきである。これは我々の希望が非常に高いということではなく、理の当然なのである。^(註15)

また、例えば、唐さんとの駆け引きの中で、以下のような「博士」の使い方をしている。

彼は猛然と自分の名刺を掴み上げ、いささか不自然な笑いとともに行った、「私はすべてこの博士を頼みにしています。アメリカの総統の榮譽だってまだ博士には及ばないのです。博士はまさしく状元です。私はあなたが知っておかれるべきだと思います。私の名刺に博士が記載されているということで、私には一切の資格があるのですよ。唐さん！」^(註16)

この種の言葉が作品の中で何度か繰り返される。言う者も冗談のように言い、また聞く方にも冗談のように聞こえながら、その実、言う方は冗談ではなく、寧ろ本気であるという展開の仕方である。

自分たちは「博士」であり、いわば「現代の状元」である。だから当然国家社会は彼らのために仕事と地位を用意し、さらにお金持ちで娘

がいる富豪は娘とお金を差し出すはずである。この種の発言は、本来は、留学生たちが冗談のように言ったり、聞く方もまた冗談として聞くものであろう。寧ろ冗談に留めて、公言するのは恥ずべき部類の内容に属するものである。だが、この作品の主人公の文博士は、この冗談を本気で信じ、このことに道理さえあると思っている。しかも心に思っているばかりか、公言して憚らず、更には実際に「博士を使って、官職や金持ちの娘の獲得」を真面目に、真剣に実行しようとしているのである。だから「可笑しい」のである。

一応文博士の、この「笑い」を引き起こす考え方を、文博士の「根本思想」と呼んでおこう。

この文博士の「根本思想」が分かってくると、作品の中で述べられている文博士の意見や考え方が、表面上では極めて正しいもののように見えながら、実は文博士の「根本思想」から来る特有の意味を持っていることが分かる。そして、その意味が分かると、その正しいもののように思えた意見や考え方の中に含まれている更なる「可笑しさ」が見えて来始める。

まず、例えば以下のようなものである。

留学生の中には学問ばかりやっている者がいる。そういう人物は役に立たないという。

彼(文博士)は勉強を好まない人間ではない。しかし彼は次第次第に解ってきて、専ら勉強の危険性を指摘している。何人かの一心不乱に勉強している人物は、いつも彼と親しくしようとはしなかった、甚だしきに至っては彼と話をしようともしなかった。彼は感じていた、人は学問馬鹿になってはいけない。学問があれば偏屈になる。だとすれば幾らか学問があるより、まだ人情世故に通じていた方が良い。^(註17)

この部分だけからすれば、文博士の考え方は正しいように見える。勉強ばかりしていて人間のこと、社会のことに通じてない人物は確かに駄目である。

しかし、文博士から発せられる批判は、少し違う角度で読むことができる。文博士からすれば、自分たちの獲得した「博士」というのは「金持ちの家の娘と結婚でき、社会の中で最高の地位や待遇を得」られるために使えるものなのである。にもかかわらず、学問ばかりしている連中は、それを充分に活かし、利用しようとならない。だから「馬鹿」だ、ということになるのである。

ところが、この件については、真面目に勉強している留学生の側からすれば、文博士の「自分は博士であるから、社会の中で最高の地位、待遇が与えられるべきである」とか、「自分は現代の状況であるから、金持ちの連中も娘を差し出して来るはずである」という考えについていけないと考えられる。だから公然とこのようなことを発言する文博士と付き合いたくないと思っている可能性がある。つまり、他の真面目な留学生たちは「人情」を理解できなくて、文博士と付き合い合わないのではなく、単にこのような文博士を敬遠しているだけだ、と読み取ることができるのである。

このように表面上では正しい批判のように見える発言が、実は文博士の頭の中で自分の都合の良いように、歪んだ形で発せられている可能性を含んでいる。

また、次のような例もある。

文博士は帰国後、留学時代に知り合った連中のところを訪ねて、仕事の世話をしてもらいに行く。ところが、その人物たちのことごとくが、文博士の希望に添うような形で対応してくれなかった。その昔の留学生たちの態度に対する文博士の批判である。

アメリカで知り合って連中に対し、彼は二度と仲良くしようとは思わなかった。駄目だ。この留学生連中は腕が無く、団結力が無く、甚だしきに至っては義気が無い。彼は二度と彼らを頼みにしなかった。^(註18)

この批判にしても、一般に、素晴らしい共同の理想に向かって努力をする場合、知識人たちが実行の仕方も知らず、協力もせず、自分勝手に学問研究のみ行っていることに対して行われるものである。しばしば、このような批判は正しい場合が多い。

ところが特に文博士の場合には、よくよく考えてみると、違った意味に取れる。彼の場合は社会の中枢に、留学生たちによる巨大なコネクションの世界を作り上げようとしている。このことに留学生たちが団結し、協力しないと断言しているのであり、このために骨折りしないと批判しているのである。

こう考えると、留学生が文博士と付き合いおとしてないのは、文博士のこのような姿勢に同調してないと解釈できる。だとすれば、文博士の批判が正当ではなく、却って留学生がまともである可能性が生まれてくる。

その他にも、言葉の意味が極度にぼかされて使われていると考えられる場合がある。

例えば「博士の価値」という意味である。この「博士の価値」という言葉を文博士が使っている場面はいくつかある。作品の中で、果たして「博士の価値」の意味が何であるのか文博士も、「語り手」も具体的に述べることはない。

望みは大きく、歩みはゆっくりでなければならぬ。彼は敢えてこの社会がたちどころに博士の価値というものをしっかり認識できるとは望んではない。^(註19)

とか、

振華の話聞いて、彼は彼女が全く博士の価値を理解してないので、何も話す必要はないと感じた。まして彼女の話なんぞは、きっと留学生に酷い目に遭わされことに因るもので、失恋からの先入観があると彼は思った。^(註20)

のようなものである。

一般的には「博士の価値」といえば、恐らく学問領域で最高の研究成果を収めているだけに、普通の人々より更に高度な部門で社会に貢献できるという意味で取られるように思う。確かにこの意味で取れる部分もある。しかし、文博士が「博士の価値」述べる時には、作品の展開からすれば、「博士の価値」というのを「博士には社会の中で最高の地位、待遇が与えられるべきであるとか、博士だから金持ちの連中も娘を差し出して来るはずである」という意味で読んでも別に不都合は起こらないのである。いやその方が寧ろぴったりするように思われる。あるいはもっと単純に、自分のことを大事に扱うのが「博士の価値」を知っている人で、大事に扱わない人がそれを知らないと言っているとも取ることもできる。

作品の文章に、この二重の意味を汲み取ってみると、これらは、表面上は、当時の知識人の欠点に対する「正当な」文博士側からの批判のように見えながら、実は批判しているはずの文博士の方が却って作者によって批判されていることになっているというふうにも言えるのではないか。

このように、この作品にはこのように巧妙に仕掛けた「笑い」がある。根本的な「思想」は違っているのに、出現した言葉が完全に同じになるという不思議な一面を描き出し、読者を笑わせているのである。

四

しかし、文博士がこのような態度、このような考え方で社会の上層部に昇って行ってしまったことになったら、そこに何ら問題は生じないのだろうか。この点について作者はどのように指摘しているのか。

この作品の中でただ一人、文博士たち、留学生の態度を批判する人物が居る。唐さんの娘で、振華という女性である。彼女は批判して以下のように言う。

私はあの焦委員の処からやって来た青年たちを更に残念に思っています。彼らは最高の仕事を望み、最高に金のある奥さんを望み、決してその仕事そのものが他の人にとってどんな良い点を持っているのかということを見ないし、本当に自分を助ける女性を捜して結婚しない。彼らは自らは最も上等な人物であるとうぬぼれ、いつも何の労働もせずに、いつも最も良いものを食べ、最も良いものを飲もうと考えている。^(註21)

この批判は文博士に対して行われたのではなく、以前焦委員から派遣されてきた留学生に対してなされたものである。振華は文博士がそのような人々であって欲しくないがために、このようなことを言っているのである。しかし、読者に与えられている情報からは、文博士もそのような人物の一人であることが分かっている。

この批判に、文博士は以下のように答える。

文博士は非常に不自然に笑って言った。「ミス唐、たぶんあなたとは何処まで話しても意見が一致することはないでしょう。もしかして、もしかしてなんですが、ごめんなさいよ、あなたはかつて留学生に振られたことがあるのではないですか？だから彼らがそこあたりの兵隊にも及ばないなどと考えられているのではありませんか？」^(註22)

冗談の発言のように見えながら、実は文博士は大真面目に答えていると考えた方が、作者の意図に合うと考える。

既に見てきたように、文博士は、留学生であれば、振華が指摘するようなことを考えるのは却って当然であり、何ら悪いことではないと思っている。だから振華の留学生一般に対する「兵隊にも及ばない」^(註23)という批判を、そもそも個人的恨みとしてしか理解できないと解釈すべきである。つまり、文博士は振華の指摘している留学生の態度を「当然のこと」と考えているのであり、それが「兵隊にも及ばない」と言

われても、本当かどうか判断する基準を持たないのである。だから、振華の発言を個人的恨みによるひどい侮辱と考えるしかないのである。

このことは、さらに「語り手」が以下のように、わざわざ解説していることから明らかである。

国内で勉強をしていた頃、彼はただ成績と卒業証書を得ただけで、なにがしかの生活に関わる教訓を聞いたことはなかった。アメリカに留学しているとき、授業に出ることと教科書を読む以外、決して何らかの道徳の修養と生命の認識を体験することはなかった。目的は学位を得ることだった。だから他のことに関心を払う必要もなかった。^(E24)

そもそも「良い」とか「悪い」とかの道徳的基準が文博士の頭の中にインプットされていない。だから文博士は振華の言うことが本当に理解できないのである。このことを、作者は念を押すかのように、さらにこの文章ではっきりさせているのである。

また、読者に与える文博士の印象という点から考えれば、このような文章を加えることで、作者は読者が文博士を「悪人」としてしまふことを防いでいることになると考えられる。少なくとも作者が文博士は意識的に「悪い」ことをしようとはしてないと説明していることになる。ここに作者の、主人公を「悪者」にしないように書いている意志を見ることが出来よう。

しかし、このような人物に何も問題は起きないのか。「悪い」人物ではないにもかかわらず、「悪い」ことをするようなことはないのか。この文博士のような人物が、本人は意識的に「悪い」ことをしようとしてないにしろ、結果的には恐ろしいことをしてかしてしまうとしたらどうだろう。次の場面をみてみよう。

唐さんが官職の一つとして持って来た仕事を、仕事の内容に関しては何ら問題にせず引き受けてしまうのである。その仕事というのは以

下のようなものである。

「彼らはある委員会を設置しようとしています。もっぱら過激な思想や人物を調査し消滅させるためのものです。委員はすべて兼任ですから、当然ながら仕事をする時間がほとんどない。そこで一人の専任を招聘しなければならないとなったのです。……（略）……至るところで調査するのですから、当然身分だって低くはありませんし、県の長官から一切の地方官吏は皆しっかりと仕えなければなりません。……（略）……おそらく一年か半年仕事をしたら、きっと中央に転勤ということになるでしょう。中央はこの仕事を非常に、非常に重視しているのです！」^(E25)

文博士に「真つ当な道を歩いてもらいたい」と願う側からすれば、博士にこのような恐ろしい仕事をして欲しくないと思う。仕事の中味をしっかりと考え、きっぱりと拒否して欲しいと願う。作者も読者の、この当たりの心理を計算に入れている。その証拠に、博士は「ちょっと考えさせてくれ！」とこの話に躊躇する。読者を焦らしているのである。

しかし考えた後に出てきたのが、次のような言葉である。

「それは、唐さん、大まかにいうと、専任はどのくらいの給料を貰うことができるのですか？」^(E26)

この言葉は読者の期待を完璧に裏切る。仕事の性格にも関わって、これを引き受けるのか、それとも断るのかという重大な局面である。それにも拘わらず、返ってきた言葉が「給料は幾らなのか」という余りにも呑気で、単純すぎる。この落差という点で、ここにも「笑い」が生じる可能性がある。しかし、普通の人の感覚からすればそうであるが、文博士にすれば、この言葉は、最初から「仕事」に対して「まず四五百元ぐらいら始めよう」といった、文博士のもと

もとの金銭に対する「思想」があるわけで、これからすれば、当然であり、一貫している。

そして「これは出世の道でしょう？」という唐さんの言葉に、この仕事をやる決心をしてみまい、読者の文博士がこのような仕事を引き受けて欲しくないという期待は裏切られることになる。むろん、この承諾は、文博士の発言からすれば、少なくとも仕事の中味を考えた上での判断ではなく彼の「根本思想」に基づくことは明らかである。

文博士はこのような「官職」に就くことを知識人として「恥ずべきこと」であるばかりか、寧ろ「悪いこと」だとは思っていない。しかし彼自身は「悪いこと」だとは思っていないにも拘わらず、結果的にはこのような仕事に携わることによって「過激な思想や人物」を抑圧するのである。文博士のような人物はこのような罪を犯す可能性を持ったのである。

五

次に博士の「根本思想」のうち「金持ちのお嬢さんの獲得」はどのように展開し、結局どのようなようになるのか、である。

やがて、文博士は服装をきちんと整え、済南の老舗薬問屋、大生堂を訪問し、そこで第六番目の娘、麗琳と会う。

最初の訪問の後、「楊家の娘」が文博士を出口まで送ってきて、また遊びに来て下さいと言う。

会った結果、幾らか欠点が見えた。例えば、姿や形が美しくない、服装がやけにアンバランスである、学歴が低すぎる、などである。だが、いくらか迷ったあげく、ついには文博士は以下のように決める。

彼は他の女性を想定してみた。学問があり、年も相応で、しかも互いに愛し合っている。しかしお金はない。彼は急いで決定しなければならなかった。ぼやぼやしていることはできない。どちらを選ぶのか？ 彼は目を閉じた。やはり楊家の

六番目のお嬢さんにしよう。自分の前途がすべてであって、他のものはうそっぱちだ。お金があって前途が開けるといふものだ！ …… (略) …… 彼女はきっと彼に金銭と勢力をもたらしてくれる。^(註27)

「金持ち」の女性ならばどのような人物でも良い。文博士の、この考え方は、作品の冒頭から一貫している。しかし、一貫しているにも拘わらず、なお強い決心が揺らぐということは、彼女の持つ欠点は文博士にとって相当気がかりな点なのであるということもできる。しかし、やはり「楊家の六番目の娘」を選択する。これは自分の「前途」のために、彼女がもたらすであろう「金」と「力」が必要であるから彼女を選択するというのである。

そして二回目に楊家に行ったときに、すでに文博士は彼女の部屋に導かれることになる。意外にも「楊家の娘」の方が文博士に対して寧ろ積極的な態度を取るのである。

この好意的な雰囲気の中で、彼女が中国名が明貞であり、さらに外国風の名前を持っており、それを麗琳としていることを知る。そしてさらに、文博士は、彼女の「学歴」に対する返答について以下のように考える。

彼女は素直に包み隠さず、ただ高校を卒業しただけだと言った。こうなったのは彼女がもっと勉強したいと思わなかったからではなく、楊家が息子や娘たちが最高の教育と資格を持つのを喜ばなかったからである。というのは、このような資格を持った幾人かは帰って来ようとはせず、外で独立して事業を始め、そのまま一と帰って来ない。楊家はこんなふうによくの金を使って再び叛徒を作りたくないのだ。彼女は如何せんその機会を得ることができなかったのだ。このことを文博士は彼女のためにとても残念がり、また彼女を十分許すことができた。^(註28)

この部分は文博士の側から述べられており、

麗琳が高校を出た以外に、さらに何をどの程度話したのかという点は言及されていない。

この文博士の見解は、作品の前半で、例えば振華という女性に対して、師範学校を出た、小学校の教員であるということ、さかんに学歴の低さを問題にし「博士」の称号を持つ自分には相応しくないというような言い方するのと対照的である。明らかに、麗琳が「金持ちの娘」ということで、文博士の「学歴に対する見方」が前半と異なっている。それほど文博士が麗琳に対して彼女が金持ちの家のお嬢さんという理由でえこひいきしているということなのである。

また、文博士の観察を通して、彼の立場から楊家の方は留学生についてどのように考えているのかについて書かれているのが次の部分である。

同時に、彼も楊家は子供を外国で勉強させるお金がないのではなく、子供たちが高度で深い学問や独立の能力を身につけ、次第にこの大家族が崩れていくのをおそれているのだとはっきり知っていた。自分の子供を外国にやるのが都合が悪ければ、最も良い方法は留学生を連れてきて娘婿にすることだ。^(註29)

さらには文博士の視点から、麗琳が文博士をどのに思っているのかを推察するのが以下の部分である。

彼女の様子から彼女が本当に深く学びたいのかどうかは暫く置くとしても、彼女が本当に博士或いは修士に憧れていることが分かった。彼女にはいっさいのものがあるが、ただこの資格だけがない。このことを見て取って、彼は本当に巧い具合だと感じた。彼には資格があつてお金がない、彼女には金があつて資格がない。こりゃあいい。彼と彼女は当然それぞれ補い合える、天地が設けた因縁だ。^(註30)

文博士の観察からして、楊家も留学生であれ

ば娘婿としても良いと考えている上に、麗琳もまた「博士」や「修士」に憧れている。だとすれば彼ら二人が結婚することには何ら問題は起らない。

しかし、本当に文博士が麗琳をこのような理由で選択したことで、何か不都合なものは生じてないのか。

前節で述べたように、この作品の作り方は、この作品世界の向こうの方に、もうひとつの「事実」の世界があり、この部分は「語り手」によって時々しか明らかにされない。麗琳や楊家のことについても、文博士は「金持ち」ということで麗琳や楊家のことを好意的に見ようとしているのであるから、文博士の方から聞いただけでは、読者も本当は麗琳や楊家の「事実」はどのようなか分からないのである。言い替えば、この作品が、このような不透明な部分を故意に残し、読者の「事実」を知りたくてたまらないという心理をくすぐりながら、物語は展開されていることにもなる。

だがしかし、いくら文博士が好意的に麗琳を見ようとしても、そうできない「事実」が厳然として目の前に現れる時もある。これが以下の場面である。

文博士が麗琳を連れているときに、街で突然振華に偶然出会う。

彼の心は乱れた。振華と麗琳は彼の心の中で、まるで天秤で測っているかのように、高くなったり低くなったりしていた。振華には麗琳と比べることのできる学歴はない。どんなふうにしても彼女も駄目だ。しかし彼女に突然会ったことが、彼に麗琳の卑しさを感じさせ始めたのだ。振華の心の有り様と服装が彼に無理矢理このことを認めさせたのである。彼がもし麗琳の卑しさを認めるならば、自分の甲斐性のなさを認めないわけにはいかなかった。振華の姿が彼の心の中にあり、彼は全く呼吸さえも気持ちよくできず、胸苦しくなった。/しかし、彼は自分が既に麗琳を捨てることができないことを知っていた。だったら、彼は

振華を憎むしかなかった。もともと憎む理由なんか無かった。でもこうしなければもう二度と麗琳と親密にすることができなくなるだろう。^(註31)

この文から察するに、文博士は本当は以前から麗琳の欠点として「卑しさ」^(註32)のようなものを感じていたと考えて良いだろう。だが文博士は、それを敢えて認めることをしてなかった。ところが、振華に会うことによって、文博士は疑いようのない「卑しさ」を否応なく、はっきり知らされることになってしまう。

だが、あくまで文博士はそれを認めることはできない。もし、認めれば麗琳と結婚などできないばかりか、麗琳を棄てざるを得なくなってしまう。ところが、既にもう少なくとも麗琳を棄てることはできない処にいる。棄てるには余りにも深い関係になり過ぎた。だとすれば麗琳を棄てず、尚かつ自分を正当化することはできるのか。この結果、行き着いたところが、もともと「憎む」理由のない振華を「憎む」ことである。

作者がここに「憎しみ」の生ずる一つのメカニズムをさりげなく指摘している。相手が何も「悪いこと」をしない場合にも、相手を憎むことがあるというのである。

しかも、更に、文博士が、少なくとも「金持ち」については「真実」を見ようとしていない、或いは「真実」を見極めていないので、その「真実」が現れるたびに、自分を正当化するために「真実」を気づかせる誰かを憎んでいくことになるだろう。また更には、憎しみが終わるところか、もしかしたら、憎しみの余り、その誰かを罪無き罪に陥れたりするかも知れない。このような可能性が作者のこの指摘の延長線上に存在している。

六

いくらか「秘密」めいた彼女の「真実」は、最終的には「語り手」が介入し、以下のように明

らかにすることになる。

文博士が知りたいくせに、敢えて訊ねなかったのは、このようなことである。……(略)……高等小学校、中学校、高校と、みなどうにかこうにか卒業できた。卒業できたというより、学校が人情を掛けないのは具合が悪かったからだという方が寧ろ当たっている。彼女はさらに大学に行きたかったのだが、合格しなかった。彼女は決して大学に行ってしっかり勉強したかったのではなく、自分のために資格を準備して、あわよくば留学生のような類の人物に嫁ぎたかったのである。^(註33)

幾らかの伏線はあったが、此処に来て、明らかに博士の考えている女性とは全く別の女性が「語り手」によって明らかにされる。

さらには以下のような驚くべき事実まで明らかにする。

楊家には絶えず留学生がやってきたのだが、彼女に回ってこなかった。なにせ彼女は「六番目」の娘だったのだから。虚栄心からすれば、ただ辛抱強く待つしかなかった。だが、朝から晩まですることが無く、暇でじりじりとし、そのじりじりとした焦りがついには理想を投げ出させることになった。……(略)……彼女は楊大奥さんに自分のために一人の家庭教師を雇って貰った。授業を補習し、大学受験に備えるためという口実であった。大学をまだ卒業してない、朱という人物がやってきた。この朱先生は容貌は普通だったが、年が若かった。家に入った途端、彼女に捕えられたみたいだった。久しからずして、彼女は身籠もった。/子供は処分した。彼女自身は決して朱先生が好きではなかった。彼女はすでに彼と一緒にいる気持ちはなく、楊家の人は適当に彼を辞めさせた。彼らは自分の家の娘が大学の学生のために準備されたものではないと考えていた。^(註34)

そして続けて、麗琳が文博士に決めた理由を彼女の側から明らかにしてみせる。

文博士がやってきたのも実にタイミングが良かった。麗琳の目には、男性はみなほとんど同じだと写っていた。ただ、学位さえ持っているということで、彼女自身と全家族を納得させることができた。……（略）……彼女は文博士を手放すことはできなかった。たとえ彼がもっと醜くとも我慢しなければならなかった。彼女はもう待てなくなった。……（略）……極めて細かい目の網を張っていた。文博士が顔を出した途端網の中に落ちてしまったのだ。もちろん、文博士はこれを幸運だと考えていた。^(註35)

ここまででは、読者はいくらか不安を抱きつつ、文博士の側に居た。しかし、このように「真実」が明らかにされると、語り手によって事実が明らかにされたことで、読者は事実を知っており、ただ文博士だけが事実を知らないということになってしまう。ここに来て、読者は文博士とは明らかに違う次元に立たされたのである。

したがって、これ以後は、文博士は一人、読者の前で踊り始めることになる。いわば非常に滑稽な人物になってしまうのである。事実を知っている読者の前で、事実を知らない文博士は、麗琳をあくまで「賢い」と持ち上げ、そして自分の主張、観察のすばらしさを誇ることになる。だが、それは空虚に響き、もはや読者に対して何の説得力も無くなっている。

しかし、この、もはや「愚か」に見える文博士が一方では、確かに麗琳と一緒にすることで、「金持ち」の家のコネができ、前節で述べたようにそのコネで、官職も手に入れることができている。これによって、既にある種の「力」を手に入れ、彼の意志で人を辞めさせたり、人の権利を奪うこともできるし、「過激な思想や人」を弾圧できるようになっている。しかも金持ちの娘と結婚したことで無実の人を憎むことも覚えた。こう考えると、確かに滑稽なのだが、一方ではそれが滑稽なだけに却って怖いのである。

七

もう一点だけ、「一」でも少し述べたが、それは、この作品が物語の最後まで行って更にもう一度冒頭に帰っていくように創られていると考えられるということについてである。作者は少なくともこの作品を意図的にそのように組み立てているのではないか。ではもし、最後まで読んで全体を理解したとき本当の意味や可笑しさが分かってくるのであれば、例えば作品の冒頭にある、解釈不充分的、以下の文博士の意見はどのように解釈すればよいのか。これに答えておく必要があるだろう。

西門或いは南門を通るたびに、あの壊れた城楼や城壁の砲弾の痕を見、文博士はまるで料理の中の蠅を食べたみたいな吐き気を感じた。吐き気だ。悲しみではない。文博士は決して五三惨案を記憶しておくことに熱心でないことはなかった。そうではなく、彼はこんな壊れたものをいつまでも大通りに置いておくべきではないと感じているのだ。修理できるのなら修理し、できないのならばいっそ壊してしまえばいい。修理もできない、壊もしない、こんなところに中国の希望のなさが現れている。^(註36)

文博士は、作品の最後の場面で、既に官職を得て、召集した最初の会議で事務所の問題を取り上げ、事務所をの一角を占領している他の団体を追い出し「内外を全てにペンキを塗り、一時に大改造は無理としても、少なくとも床板と取り替え、水洗トイレを設置し、幾つかの事務机とカードボックスなどを注文しなければならない」^(註37)という提案をする。文博士はこれらが必要なものであるということは「アメリカのやり方と体裁をもって裏付けられる」^(註38)としている。

このような事例から考えると、冒頭の文博士の言葉は、文博士独自の「思想」に基づいて発言されたのではなく、単に「汚い」とか「体裁

が悪い」というような感情に基づき発言していると解釈できるのではないか。文博士は「汚い」「体裁が悪い」という根拠でもって弾痕のある西門や南門の、あの壊れた城楼や城壁を壊してしまうか、修理するかしてしまうべきであると主張しているのである。文博士の主張の根拠というのはこんなものであると考えられる。余にも単純過ぎて、恐らく読者は啞然とするのだが、この作品では、寧ろ読者をこのように啞然とさせることを狙っているのである。

また、

理に従えば、帰国したら直ちに最高の地位と待遇を得べきなのである。もしこんなふうであれば、彼にはきっとこの遅れた国家を救う方法がある。たとえ自分が素晴らしい方法を思いつかなかったとしても、少なくとも彼には応用すべきアメリカの方法というものがある。^(註39)

という言葉であるが、ここにも啞然とさせるものがあるように思う。中国を救う自分の方法というものは皆無で、文博士にあるのは、ただ「アメリカの方法」だけであるとしたらどうだろう。だとすれば結局彼が中国を救う、中国を改革すると称して行っているのは、実は中国をアメリカにすることであり、そして彼が嘆いているのは中国がアメリカでないことなのではないか。少なくとも、このようにも考えられるようにこの作品は作られている。

このことから、作者が極端なまでに文博士の独自性、才能、学識のようなものを削ぎ落とし、「博士」という称号を、例えば単にものとして持っている人物に創り上げていることが分かる。これは、この物語が「文」さんではなく、資格としての「博士」の「不思議な」力を問題にしているからである。だから、やや極端を承知でいえば、このようなことを描き出すために「文」さん自身は「博士」を語るペテン師でもよいのである。

結

では、作者はこの作品で何を描き出そうとしているのか、ここで何を指摘しているのか。このことを述べて結びにしたい。

既に作者は文博士を決して悪い人物ではないという印象を創り上げようとしていると述べた。目標に向かって努力する姿は真面目で真剣で、時には落ち込んだり、悩んだりする。確かに悪い人物ではないが、一方では人を陥れたり、人や思想を弾圧したりすることもある。何故か。その理由の一つはまさしく彼が「博士」だからである。だとすれば、この作品には「博士」というものが持っている危険性と恐ろしさが描き出されていると言っても良いだろう。しかし、それだけではない。

もうひとつ、作者は読者に人間の心のありようのようなものについて考えさせようとしているように思われる。

また、いくらか繰り返しになるが、文博士は「博士」には最高の職を得、金持ちのお嬢さんと結婚できる力があると信じている。だから「博士」という称号を利用し、最高の職を得ることを企て、金持ちのお嬢さんと結婚を目論む。

この点について作者は、文博士が選んだ「職」と「金持ちのお嬢さん」に、ある種の「欠陥」を吹き込むことで答えている。「職」は過激な思想や人物を抑圧するものであり、「金持ちのお嬢さん」は遊びには通じているが学業のようなものは全く駄目で、しかも性格が卑しい人物である。文博士はこれを選択したのである。つまり、「職」や「お嬢さん」に「欠陥」を持ち込むことで、彼の、「職」の内容、「お嬢さん」に対する認識の仕方、判断基準が非常に危険であることを明らかにしているのである。

ではそのようなことがどうして起こるのか。それはそれをもたらず根底の処で、その人間に人間として当然持っているべき何か欠けているからではないのか。だとすれば一体何が欠けているのか。実はその点は余り明瞭ではない。た

だ、もしかしたら或いはその「欠けているもの」は、道徳、人間としての良心、良識、いわば人間の心の正しいあり様というようなものと言えるかも知れない。作者がこの作品で読者に最も気づいて欲しいと思っているのは、実はこの部分ではないか。

決して悪い人物ではないのだが、この「欠けているもの」があることによって、その人物が努力すればするほど、真面目にやればやるほど、却って人を苦しめ、社会を悪くしてしまうことになる。まして、この「欠けているもの」は文博士が「博士」なだけになおやっかいである。「博士」というのはやはり普通の人は違ふ。この文博士のようにただ「博士」というだけで「職」も「金持ちのお嬢さん」も手に入れ、ある種の権力を持ってしまふ可能性がある。更にこの種の人間は社会のトップを目指し、やがてはトップに座る。そうなれば社会や人々の被害たるや甚大である。

ただこの認識、判断の根底にある心のありようの問題は「博士」ということで誇張されているが、決して「博士」だけではなく、我々も大なり小なり持っているものでもある。普段は目には見えにくく、結果が小さくて気づかないだけである。（完）

（注）

テキストは『老舎文集 第三集』（人民文学出版社）に収められたものを使用した。他に『老舎小説全集 第五巻』（長江文芸出版社）や『老舎小説經典 第4巻』（九州図書出版社）にも入っている。日本語訳されたものに『老舎小説全集2 趙子曰 ドクター文』（学研）がある。これは雑誌「論語」に掲載されたものを翻訳したものである。これらものは論文作成に参考にさせて貰った。

- (1) この『文博士』の単行本出版時の改題について中山時子氏は、「単行本についてであるが、これについては不詳な点が多いといわざるを得ない。すなわち、もともと『選民』と題されて雑誌に載ったものが、どういう理由で『文博士』に改題されたのであろうか。二種類の単行本があるといわれる（『選民』の単行本はないものと思

われる）。香港版と満洲版である。前者は一九四〇年十一月作者書社から初版出版され、四〇年、四一年にそれぞれ第二版、第三版が出されたといわれている。後者は一九四一年に振興排印局より出版されたものである。ただ、これらのことについて老舎自身は何も語っていない。彼は後年、自作についてふりかえっているのであるが、それらの中に、『文博士』について触れたものをまだ見ることができず、現時点では改題のいきさつなども明らかにすることができないのは甚だ残念である。彼自身がこの作品をあまり成功作とみていなかったとも考えられる。その推測の手がかりとなるのは、あの、未完とも思える終結である。人物描写の精緻さに比して全体の構成はやや起伏に欠け、主人公がやっと獲得したポストでありながら、そのあまりにも前近代的な社会体制に何の手も打てないという絶望感のようなものを残したまま、作品が終わってしまっている点である。」（『老舎小説全集2 趙子曰 ドクター文』の「解説」と述べている。

中山氏も述べるように、この改題について作者は何も述べていないのであるから、結局推測する以外にはない。ただ改題は「作品の完成度に関わる」ようには思えない。長編小説の題を並べてみると『老張の哲学』（1926）『趙子曰』（1927）『二馬』（1929）『小坡の生日』（1931）『猫城記』（1932）『離婚』（1933）『牛天賜伝』（1934）『駱駝祥子』（1936）であり、人物の姓名を書物の題に採用している場合が多い。したがって、この流れから『選民』より『文博士』としたのは寧ろ自然に思える。老舎は題名について相当気を配っていたと考えられる。

さらに、『文博士』は取り上げられてないが、この命名に関しては日下恒夫氏の「老舎—北京の作家—」（泊園第三十二号）も参考になるだろう。この中で長篇の題名が対になる傾向があることを述べられている。『駱駝祥子』の対として『私の一生』を挙げられているが、寧ろ『文博士』の方が適当ではないか。

- (2) この点については拙論「老舎『牛天賜伝』試論」（八戸工業大学紀要17巻）を参照。
 (3) 同上参照。
 (4) 『文博士』233頁。
 (5) 同上。
 (6) 同上。
 (7) 同上。
 (8) この種の作品で最も危険なのは、読者にとって文博士が「嫌悪」すべき人物になってしまうことであると思う。そうなってしまうと、作品は読者に投げ出されてしまう。この作品の性格からして、もともと本質的には「嫌悪」すべき要素を持っている人物を、読者にはあくまで「嫌

- 悪」という感情を抱かせないように創り上げる必要がある。この条件を満たすのが、非常に難しいのであり、実はこのような部分に「笑い」が関与しているのではないかと思われる。
- (9) このような考え方は最初は伊藤敬一氏の「老舎の世界」(東大教養学部『外国語科研究紀要』・1972)に始まる。氏は論文の中で中国の物語文学の伝統に注目され、老舎作品の「物語の中にしょっちゅう顔を出す作者にしても、それは講釈師ないし共同体の代弁者としての作者であって、作者自身ではない」と述べられた。
- (10) 『文博士』242頁。
 (11) 同上。
 (12) 『文博士』268頁。
 (13) 同上。
 (14) 『文博士』257頁。
 (15) 『文博士』235頁。
 (16) 『文博士』257頁。
 (17) 『文博士』235頁。
 (18) 『文博士』239頁。
 (19) 『文博士』234頁。傍点は筆者。
 (20) 『文博士』282頁。傍点は筆者。
 (21) 『文博士』281頁
 (22) 『文博士』282頁
- (23) 当時まともな人は兵隊にならなかったということもあり、兵隊にも及ばないというのは、ひどく侮辱的な意味にもなる。
- (24) 『文博士』282頁。
 (25) 『文博士』288～289頁。
 (26) 『文博士』289頁。
 (27) 『文博士』307～308頁。
 (28) 『文博士』314頁。
 (29) 同上。
 (30) 同上。
 (31) 『文博士』319頁。
 (32) 原文では「卑賤」となっており、日本語に翻訳すれば「卑しさ」となるのだが、この作品では娼婦的な「下品さ」「だらしなさ」と言い換えても良いような意味であろうと思う。
- (33) 『文博士』320頁。
 (34) 『文博士』321～322頁。
 (35) 『文博士』322頁。
 (36) 『文博士』233頁
 (37) 『文博士』335頁
 (38) 同上
 (39) 『文博士』233頁